



Title	心臓神経症と思われる患者との面接例：夢をめぐって
Author(s)	氏原, 寛
Citation	大阪外国語大学学報. 1978, 40, p. 119-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80689
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

心臓神経症と思われる患者との面接例

—— 夢をめぐる ——

氏 原 寛

A case report of an alleged cardiac neurotic and his dreams

Hiroshi UJIHARA

This is a report of an alleged cardiac neurotic. He is a 38 year-old married male, who graduated from a high school. He could not go to his work because of symptoms of the sickness, so came to the counseling room of his company for help. After nine sessions of therapeutic interviews, most of his symptoms disappeared. I think, the reason for his break down is that he failed in his plan to become a lawyer, and also, he lost his privileged position in his section after a struggle with his section chief. According to the Jungian way of interpretation, he might have failed in making a suitable "persona", and from Eriksonian point of view, his "moratorium" might have extended too far into his thirties. All the dreams told during the sessions are recorded. I present the interpretation of them. I claim that talking about the dreams is useful to accelerate the process of counseling.

は じ め に

このレポートは、昨年度にひき続き、最近目立ってきている、職場内で出勤困難を訴えるケースについてのものである。これらのケースは、発症時の年齢、性別、職場内での地位などによって、さまざまなヴァリエーションに富んでいるけれども、ある程度の類型化の可能性については、昨年度の報告にもおいて。その一つとして、30才台なかば、既婚の比較的優秀な男子高卒社員というグループがある。これは端的に言えば、この頃に大卒と高卒との格差がいやおうなしに顕われてくるからであるが、いい代えれば日本のいわば母系制社会（河合1976）にあって、あえて比較することに目をそむけてきた人たちが、この時期に、好むと好まざるとにかかわらず、他者との比較の上に自らを位置づけざるをえなくなるからだ、と思われる。最近の新聞調査によれば（たとえば読売新聞 1977）、近頃のサラリーマンにはマイペース志向が圧倒的に多い、という。自分なりの小じんまりした幸福を築き上げることによって、他人との比較を超えた生活が目ざされているらしい。ことのよしあしについては議論のある所であるが、それがどこかステューデント・アパシー（笠原1976）と呼ばれる現象に似ているのが気にかかる。ここでのべられている学生たちは、真価を問われる専門領域ではほとんど意欲を失いながら、専門外のことには人並み以上の情熱を燃やし、時に

素人ばなれした力量まで備えているにもかかわらず、留年をくり返すのである。勝負することをひたすら避けて、おのれの可能性を遊びにしか賭けられない（賭けがすでに遊びではないとすれば、この文章自体撞着した内容を含むことになるけれども）からだ、といわれている。似たような事情は、中高生の不登校現象にも認められており、それらを現代の競争社会のもたらした歪み、ないしはそれに対する個人のささやかな抵抗、として考えることも可能であろう。しかし、好むと好まざるにかかわらず、われわれはいつか、おのれが何者であるのか、を確めざるをえない。それをユング流に言えば、ペルソナ作りということになろうか。それは自らの限界をひきうける作業、つまり、アイデンティティを確かめることでもあるが、その場合、たとえば165センチの身長が高いか低いかということは、他者との比較を通してのみ明らかになることである。その事実をどう評価するかは各人の問題であり、それとどう対処するかはさらに個人的な事柄になる。しかし何れにしろ、身長165センチという事実は変らないし、われわれにできることはその事実をひきうけることでしかない。それは、身長165センチということの意味を自分なりに確めてゆくことでもある。しかしその意味は、まず、その事実が相対的にどう位置づけられるのかを明らかにする、つまり、他者と比較することなしには確めようがないのである。

あらゆるものに二重の価値のあることを指摘したのはフロム（1964）であった。彼は使用価値と市場価値ということを用いるのであるが、市場価値は交換価値におき代えた方が判り易い。交換価値は場の状況に左右されることが多く（たとえば一つのリングの使用価値は同じでも、豊年の年と不作の年とではその交換価値がまるで違う）、それだけ相対的であるけれども、少なくとも二つの点で使用価値にない重要な意味をもっている。一つは、交換が成立するためにはまず当時者つまり二人以上の同意が必要であり、それだけ客観的であることである。もう一つは、これによって本来比較不可能なものの比較が可能になる。（たとえば米10キロと熊の毛皮3枚の値打ちを直接比較することはできないけれども、それぞれが何本の刀と交換されうるかによって、両者を比較することが可能になる。あるいは、セザンヌとゴッホの絵のどちらが秀れているかは、にわかに断定できないけれども、一たん値がつけば、絵そのものの値打ちとは違った尺度であるにしろ、両者の優劣を決めることができる）。

人間とは本来一人一人の存在が独自なものであり、お互いを比較することは不可能である。われわれが、たとえば地位や収入や学歴または能力などによって比較される時、強い違和感を覚えるのはそのためであろう。いわゆる競争社会のもたらす害毒の大部分は、人為的尺度に基づいて、もともと比較を超えたものにムリヤリ序列をつけるところから生じている。だから前述の学生たちが、真剣勝負¹の場を避けて遊びの場面でしか競争しようとししない心理も、ある程度は頷けるのである。しかし、遊びで自らの可能性を確めることは不可能である。遊びにはつねに余裕が伴うが、それは自らの限界をあえて試みようとししない態度から生じている。たしかにわれわれは、ある意味では無限の可能性に恵まれているけれども、その中で実現しうるのはほんの一部でしかない。そこで当然の結果、一つの選択が行われねばならず、それは自らの限界を見きわめる作業に他ならない。いわ

ゆるアイデンティティはそれによって確立し、ここに一個の独立した人格が生れるのである。しかし、それで失われた可能性への未練がすっかり断ち切れるものでもない。これはいわば、小児的な万能感を現実吟味によって克服してゆく仕事だから、いつまでも可能性を失うまいとすれば、いわゆるモラトリアム（エリクソン1973）をたえず延長してゆくよりない。登校拒否からステューデント・アパシーを経て、おとなの出勤困難に至るまで、私はひそかに、この、自らの可能性を限定しえない状態、として説明できるのではないかと考えている。何らかの理由で、それが30才台なかばまでずれこんだ場合、出勤困難の一つの類型が生ずるのではないか、ということである。

なお、このケースでは全部で25の夢が報告され、それらを全部記載しておいた。夢をカウンセリングに利用したケースの報告は、わが国でもボツボツ現われはじめている（鑑ほか1974、東山1976、河合1977、織田1977ほか）。しかし、報告された夢をすべて記載しているもの（河合1974、森谷1977など）はまだまだ少ない。長期にわたるケースでは、夥しい数の夢が報告されるものであるし、限られた紙数にそれらを全部記載することは難しい。いきおいそこに選択が行われ、そのために資料としての客観性の損われることがある。もちろん、ケース報告自体報告者の主観性を免れないものであるから、夢についてだけ客観性を要求するのも無理な話である。しかし、全部の夢が記載されてあれば、カウンセラーがどのように夢を扱ったかがかなり明らかになるのではないか。それが、カウンセリングと夢についての論議を一そう具体的なものにしようと思う。今回、あえてこのケースを報告するゆえんである。

なお、このケースにおいて夢について話しあったことが、面接のプロセスをかなり早めたのではないか、という印象が私にはある。それがクライアントに、問題の所在をより明瞭にさし示し、より早い洞察につながったと考えられる。それと共に症状も一応消滅し、比較的短期間にカウンセリングを終結することができた。もともとクライアントがノーマルなパーソナリティの持主であったことに負うところが大きい、と思っている。しかし、放置すればかなり深刻な事態におちこむ可能性がなかったとはいえない。

症例

クライアントは38才の会社員である。妻と5才の長男、2才の長女がおり、両親と未婚の妹が同居している。半年ほど前、会社の帰りに少し目がくらんだので医師に行くと、心臓が悪い、手遅れ、すぐ入院、ただし部屋が空いてないのでちょっと待て、といわれた。今まで山登りやテニスなどやって体に自信があっただけにショックで、会社を休んで別の医師に診てもらったら、過労からくる一時的なもので、時々不整脈が現われたりしても、そんなに心配することはない、といわれてホッとした。しかしその間3ヵ月程休み、近頃は出勤しているけれども、疲れやすく気力がわからない。それで時々休んだり早退したりしている。電車に乗っても息苦しくなるので急行に乗れない。満員電車も苦手。倒れるのではないかと気になる。人と約束すると間にあうかどうか心配でドキドキしてくる。そして手首を触っておかしいと思い、ドキドキすること自体心臓に悪いのではないかと

不安になる。それで家で子どもの顔など見ていると涙が出てくるようになった。小柄、服装は質素であるがチャンとしており、話しぶりも折り目があって礼儀正しく、全体に好感のもてるタイプである。友人にすすめられて、健康管理センターにあるカウンセリングルームに一人で来談し、約3ヵ月9回の面接で主訴が消滅して、一まず終結にしたものである。

経過および夢とその解釈

第1回 5月17日

発症までの経過の説明。職場の状況について。今までは係の中心的存在で、係長を除けば一番の年長でもあり、仕事を全部とりしきっていた。とくに、それまで一人一役的にやっていたのを、すべてみんなでやるようにし、残業などにも差のつかぬようにきり代えた。今にして思えば、そのため他の人の応援をしたりして、少しやりすぎていた。係長とは少し合わない所がある。司法試験を受けるつもりで昼休みも勉強しており、勉強のためもう少し時間のとれる仕事に变りたい、と申し出たことがある。その後超勤手当が、自分ともう一人だけ少なくなっていて、自分のやり方が崩されているのを知った。係長の意向が強かったということである。休んでから係長の態度が急にやさしくなった。仕事をチャンと申し送っておいたので、自分が休んでも係全体はスムーズに動いている。

第2回 5月24日

先週はここへ来るのもやっとだったが、今日は来やすかった。司法試験は受けるのをやめることにした。仕事の上で弁護士とやりあうことがあり、自分も思ったのだが。自分は無神論のくせに偶然を信ずるところがある。今度も「死んでもともと」という本が偶然誤配され、買うことにした。本は一ヵ月に1万円以上買う。今まで大きい望み（司法試験）のためしたいことをずい分我慢してきた。自分は脳のうちの古い方、したがってより基本的な部分をおろそかにしてきたみたいである。症状の話。今の係長の着任に当っては、課長からあの人でもよいかといわれ、とかく評判のある人だったが、自分は対人関係に自信があったのでオーケーした。自分が倒れたのは係長のせいという人もあるが、自分はそうは思わない。

インテリジェンスが高く、かなりの洞察力もあるように思われたので、夢について話しあってゆくことにする。今覚えてるものとして、

夢1 自転車で田舎道を走っている。ハンドルとお金を握っているが、その金をとろうとする奴がおり、ハンドルを放すわけにもゆかず困る。しかしがんばってとられずにすんだ。

解釈 一人わが道をゆくのだが、お金をむき出しに持っているのは、世俗的な自己顕示欲の現われで、少なくとも不注意のそしりは免れない。だからそれをとろうとする奴の現われるのはある程度当然のことかもしれぬ。しかし金もとられず自分のペースも崩さぬ強さはもっている。しかしこの人には、金をとろうとする奴の理不尽さしか意識されていない。

面白い夢ですね、とだけ言うておく。

第3回 5月31日

夢2 組合大会で1000人程の人の前で議長をつとめ、うまくさばいている。

コメント 組合活動には熱心だったが高卒の限界を感じ、25才で大学（2部）へ行ったのでその活動も中断した。弁護士になって自由法曹団といった形で役立ちたかった。昔の組合仲間が今のリーダーで、自分が資本家側みたいな役割をとっているのだからやりにくいだろうと思う。しかし、組合員に労働法の話をするように頼まれたりしている。

夢3 職場の先輩で50才くらいの人が、三陸沖の湖のある景色のよい所へ舟で行こうとしている。自分はそこは地続きだから車でも行ける、と主張している。

コメント この先輩は途中から転職してきた人で、まじめでやれる人だが平で終る人である。自分とはそれ程親しくない。三陸へは以前から行きたいと思っていた。地面がずっと出っぱっていて、なぜ地続きと思ったか今思うと解せない。

夢4 公開の映画村へ長男を連れてゆく。セットの前に壇があり、そこに何十人か乗ると上から網をかぶせられ、その儘吊り上げられて滑車で100メートル程行きながら、下のセットを見物する。満員でしんどく降りた所で子どもが疲れたという。

コメント わけが判らない。

夢5 習字の展覧会の飾りつけをやっている。皆はキッチンと同じ高さにはっているのに、自分だけは高低デコボコにはっていて、それでおかしいとも思っていない。

コメント 習字は下手。立場上今まで香奠書きなどやらされたが、マイペースで人のことは案外考えてないのかもしれぬ、という、その通り自分も考えた、と答える。

解釈 夢2では、この人の権力志向的なものが出ている感じである。夢3は一種のユートピアで、だからこそ退職後海を越えて訪ねるべき土地なのであろうが、この人は現実の手の届く所にあるように思っている。夢4も、せっかくの楽しみが、実はお仕着せのレールに乗ったもので、満員電車につめこまれ疲れることのくり返し、といった無力感を反映しているのかもしれない。夢5は、習字というこの人の不得意なものが現われて、そこではまったく型破りなことをしていながら、それを何とも思っていないこの人の一面性が示されている。

この人の名誉心や権力志向についてそれとなくいってみるが、まったくうけつけられない。一緒に大学（二部）へ通った仲間が何人かいて、みんなそれぞれ偉くなっている、というので、今の仕事はこの人が精一杯ぶつかる程のものではないのかもしれぬ、といってみるが、25才頃まではたしかにそうだった、とこちらの意図は伝わらない。又、高卒では限界があつて、といいながら、その口惜しさが明らさまでなく、両親と長い間一緒だった、とだけいって具体的な話は出ない。夢から考えても、この人に鬱屈したものがある筈だと思うのだが、話されることは余りにもまともな感じである。帰り際「夢は面白いですね」という。

第4回 6月7日

夢6 ダイレクトメールを封筒に入れている。自分はまず宛名を書いてから入れているのに、他の人は入れてから宛名を書いている。

コメント これは実際にもよくやることである。先の展覧会と同じく、この人だけが違ったことをしていることを指摘する。

夢7 配置転換になっている。仕事ははりきってやっているのだが、やはり元の所の方がよかったかもしれぬ、と思っている。

コメント 新しい職場に変るのは以前からよく見る夢である。司法試験のため転職したかった。それで係長にもいい課長にも頼んだ。その時課長に、お前が面倒みているあの2人（同じ係の若い人）をどうする、といわれて1年待つことになった。ひょっとしたら変りたくない、したがって司法試験も受けたくないのかもしれぬ、という、自分としては試験に合格するかどうかよりも、それが何らかの形で皆の役に立てばとしんそこ思いこんでいるつもりだ、と答える。以前の仕事は、支店全体に目を光らせて、たとえば異動の時に課長から意見を訊かれたり、欠勤の多い人については担当係長に事情を聞いたり、又、直接課長や支店長から公私の依頼をうけたりして、ある意味で黒幕的存在であった。それだけ人から恨まれる可能性がなかったとはいえない。やりすぎてもやらなすぎても具合の悪いポストだ、という肯定する。感じとしてはやり過ぎ。又、内心得意な面があった。ということは、今の状況に不満がある筈なのだが出ていない。

夢8 広い体育館。その板の間の上に妻と上の子が布団を敷いてよく眠っている。枕元の机で自分が立って墨で字を書いている。中は灯りがついているが、扉の外から妻の弟が、出てよい、というようなことをいっている。

コメント 妻の弟は、子どもが一人あるのに車とゴルフにこって、日曜日はほとんど家にいない。妻はある女子大の助手をしていて、結婚しなければずっと働いているつもりだった。明るくてハキハキしており、自分がこんな風になって子どものことなど心配しても安定していた。今度結婚する時も今の妻を選ぶ。小学校時代成績はトップだったが、習字だけは下手だった。係では一番ましと思っているが。結局体育館は出てゆかねばならぬかもしれぬ、といっておく。

解釈 夢6は、この人は人並みに協調しながらやっているつもりでも、どこか違っている。又は、他の人がこの人の思っている程には、この人についてきていないことを示しているのかもしれない。夢7は、やはり司法試験と絡んでいると思う。コメントは、この人の重みのようなものを示しているのだが、そういう大物の部下を抱えた係長への配慮がまったくない。この人に十分やらせるだけの雅量のある大係長ならば問題ないのだが、普通の係長ではずい分傷つく筈である。夢8は、この人の家庭生活が、この人の思っている程にはうまくいっていないかもしれぬことを示している。広いが寒々として、閉じこめられた感じがある。そこでこの人は、再びおのれの不得意な面（習字）で仕事をしている。今まで、十分に開発されなかった面が少しづつ開かれてゆくのであろうか。妻の弟はおそらくこの人の影の部分であり、今度結婚する時も今の妻と、と考える程に家庭に忠実な

この人に対して、日曜日にも家にいない遊び人である。その人が、外側のもっと明るくて広い世界にこの人を誘っているのは面白い。

先週ははじめの3日程調子よく、これでいけるのかと思ったが後半崩れ、金曜は早退して土曜は休み一日寝ていた。今まで一生けん命にやってきたのにこんなことになって、と涙ぐむ。しかし、電車の中で倒れたら恰好悪いと思っていたのがなくなった。又、倒れても何とかしてもらえると、思うようになった。又、以前気づかなかったこと、たとえば、肝臓の悪い高校生が、いつまで生きられるかと考えると、一本の草花を見てもその生きている実感が迫ってくる、といっているのをテレビで見て、その気持がよく判るように思った。

第5回 6月14日

夢9 いすに坐って本を読んでいる。普通は読めないのに行から字まで頭に入ってゆく。はじめてである。しかし何が書いてあったかは覚えていない。(翌日同じ夢を見たが今度は読めなかった)。

コメント 今まで夢の中の読書は眺めているだけだった。内容は「死んでもともと」と似ていたようで、こだわるなということだったみたい。読んでいてよいことが書いてある、覚えておかなければ、と思っていた。本当に何が書いてあったか興味がある。

夢10 以前一緒に仕事をしていた50年輩の係長が、スーパーで乾物屋をやっている。こちらでいくら挨拶しても答えてくれないのが不思議である。

コメント この人は凄い皮肉屋で、皆に辛辣なあだ名をつけている。とくに上司に食ってかかる所あり、嫌っている人も多い。自分は好きである。就職した当座、1日1時間位は本を読んで勉強しろ、といってくれた。3日前職場に訪ねてきてくれたが、休んでいたので会えなかった。

夢11 家の近所で田植えが盛んである。ところが田圃の中に温泉がわいたというので、弟たち3人と一緒に行く。立札があって水温は20度と書いてあり、これじゃ寒いからと自分は入らないで帰る。すでに先客が3人おり、一緒に行った3人も入ってゆく。

コメント よく判らない。

解釈 夢9 夢の中で、いわば知恵の書とでもいうべきものにめぐり会っているのかもしれない。それだけ、今まで気づかなかったものに開かれつつあるのであろうか。夢10は、この人の対人関係が、この人の思っているのはどこか違い違っていることを示している。夢11は自分の家近くの田植えであり、これから育くむべき苗を大地にさしているのだから、この人なりの芽生えないしは成長を期待してよいのかもしれない。しかしそこに温泉が湧出したのは、これも大地のエネルギーが地上に噴出したわけで、長い間眠っていたものが現われ出たことになる。しかし、一方が完全にコントロールされたものであるのに対して、こちらは人力の思いもかけぬ力を示しており、時に破壊的に働く可能性すら含んでいる。幸か不幸か水温は20度で、ある人たちには十分適用するのに、この人の役に立つだけの力、あるいは、この人にそれを生かすだけの態勢、がまだ整っていない。

い。何れにしろ、この人の中の未知の可能性が、どうやら何かの形をとりつつあるのはたしかのようである。

高2の時父が失職して進学を諦めた。卒業後両親と弟妹3人の家族を自分の収入で支えた。その後父が再就職したが今は年のせいもあり仕事はやめている。母も健在。妻と母の関係は難しいものと心配していたが、お互いにうまくやっているようである。母が料理下手なこともあって、家計は妻が握っており、母と妹が食費を入れているらしい。だから家のことが今の症状に関係しているとは思えない。係長は自分の気に入った人とそうでない人には態度を変える。許せないとは思いますが、あんな人と思えば腹も立たない。この人が余りにも傷つかず腐らずひがまないのでむしろ不自然だし、今度のことも係長との権力斗争に敗れたからかもしれない、と少しハッパをかける。又、心の問題が身体症状におき代えられている可能性についても指摘しておく。

第6回 6月21日

夢12 家の横の道路にテーブルを出して、新聞の折りこみの機関車の模型を、何人かの同年輩の人たちと作っている。そこへ2年前に係長になった友人がやってきて話しかけてくるのだが、今度はこちらが後でとか何とかいって答えない。

コメント この係長は自分と一緒に大学へ行った友人。やはり大卒試験はうけなかった。(この人の会社では、在職の後大学を卒業した人に、大卒社員の資格試験をうけるチャンスを与えている。しかし、収入が一時的にかなりダウンするので、受験しない人が少なくない、ということである)。

夢13 電車を降りて改札口へ行くと、駅員が皆に切符を渡している(皆が機械から各自とっている?)。それが自分の前で切れてしまい、自分は定期を出して外に出る。するとらせん状の階段があるので、どうして自分には切符がないのだろうか、と思いながら登ってゆく。一番上は庭園になっていて、ここで同僚に出会う。一緒に大学へ行った仲間の一人だが年はかなり若い。

夢14 課長が職場で倒れたので自分が家まで送ってゆく。高層アパートで課長が先に登ってゆく。ところが5～6階あたりで突然課長と自分の間の階段が崩れ、自分はぶら下って上に行けない。しかし下は階段一段分も落ちれば届く高さである。

夢15 百貨店へ本を買いに行きエレベーターに乗る。5～6階あたりでエレベーターが回転し、ついで又一回転して元に戻り、8階に着いたので降りる。

夢12～15のコメント 上に登る夢を続けて見た。職場には多勢の人がいるけれども、次の昇任が誰かは大体判っている。実は自分の番が来ていたのだが、こんなことになって別の人がなった。昔の仲間で係長になった者を、羨しくないといえは嘘になる。しかし司法試験をめざしていたこともあって、昇進するとかえって困る気持ちもあり、それ程こだわってはいなかった。司法試験を諦めたことについてはやはりこだわりがあり、家で本棚を眺めていると涙の流れてくることがあった。この頃は何ともない。

夢16 又異動で係が変わっている。しかし前の係の人がいろいろ訊きにくるので、そっちへ行ったり戻ったりの状態である。

コメント 転勤しているのは4回目か5回目の夢である。

解釈 夢12は、人目につく場所で大の男が何人もかかって子どもだましの遊びをしている。この人の仕事に対する気分の現われかもしれない。そこへ出世した友人が来るが、ふて腐れて相手にしない。この人の微妙なコンプレックスの現われと思う。夢13、自分だけ切符を手に入れてない佗びしさ。曲折の末登った所も要するに自分たち仲間同士の場所にすぎない。そして夢14では、自分の助けた課長さえ、実は手の届かぬ世界の住人である。かといって奈落に落ちこむわけではないけれども。ギクシャクと辿りついた夢15の8階は、多分ただの本屋にすぎないのであろう。本人もいうような上昇志向が、さまざまなフラストレーションを伴いながら鬱積しているのは明らかである。夢16は、職場にとってなくてはならぬ存在として、現状とはまったく裏腹の夢である。

前回いわれたので、自分の中に係長に対する腹立ちがあるかどうか考えてみたが、ない、という。今回の夢が全体に上昇志向を示しながら、どこか佗びしい感じをもっていることを指摘し、心の動きは思ったより自動的なもので、夢も一つの事実としてうけとめるより仕方のないこと、職場に関する夢の多いのは、この人の問題が多分に職場にかかわるものであること、などについて話しあう。

第7回 6月28日

夢17 多勢が広い部屋で仕事をしている。自分にわり当てられたのは、睡眠時間と尿量の相関関係を調べる仕事で、沢山の試験管を使ってやっている。

夢18 会社で誰が忘れていったのか、老眼鏡や目薬の入った箱があり、係長にいわれて自分がどこかへ運んでゆく。

解釈 夢17は夢12に通じるもので、仰山なことをやりながら仕事そのものはナンセンスに近いのである。この人の、仕事へのあき足りなさのようなものが出てくる。夢13も置き忘れられ片づけられるものであり、係長のイニシアティブが示されている。

先週は元気に出勤した。課長に会って今までの係長とのいきさつをぶちまけたら、知らなかったといって納得してくれた。今の係長が来る時に、この課長から二人の候補者を示されどちらがよいか訊ねられた。自分はどちらでもよいと答え、後で係の人たちを集めて、どちらに決っても今までの係としての纏りをなくさぬようにしよう、と話しあった。係長の嫌な所は、たとえば以前、自分が出る筈の会に支店長も出るのが判ると、係長が行くといい、都合で支店長が急に出られなくなると、又自分に行かせたり、客が来ると前の係長ならばその場で会って、時にはわれわれの意見も聞いたりしたのだが、今の係長は必ず別室へ連れてゆくことだ、などという。係長が二人いるみたい、貫録のある部下がいると上役はやりにくい、などと私がいうと、自分がそんな上役の立場に立つ

でも困るかもしれない、と答える。又、先週いわれた上昇志向のことは、会社内ではともかく、高校時代の友人と比べるとあるかもしれない、同級生はほとんど進学して大体課長クラスになっている。その意味で、係長なんてという気持ちがなかったとはいえない。そこで、司法試験はそれらのギャップを一気に埋める可能性をもっていたことを指摘する。そして、仕事以上の貫録の持ち主としてどう仕事に対処してゆくか、たとえば考えられるかなりの余裕を何についやすかが問題、ということ話をあう。少し元氣の出てきたのはよいが、それが係長征伐という形をとったのではまずい、と思う。

第8回 7月5日

先週は更に調子よく、時間のたつのが早かった。皆がチャンと仕事をしてくれているので満足であるというので、それだけこの人の存在が不必要になっていることを指摘すると、課長が判ってくれているから大丈夫、と答える。以前は休暇をとる時も、係の人はまず自分の了解を求めた。その間の仕事を肩代りしてもらい意味もあり、自分もそのつもりでいたのだが、今考えると係長としては面白くなかったと思う。だから、この頃係長のきげんのよいのは自分をやっつけた満足感からだ、と思うようになってきた。支店長は毎朝10時頃来るのだが、係長はいつもその頃まで喫茶店にいる。何をしているのか知らないが、他の人がやると文句をいうのだから筋が通らない。しかし得意先と話をつけるのがうまく、もめた時などずい分役に立つ人らしい。夢は沢山見るわりに忘れるのが多い。

夢19 ジャングルの中にきれいな川が流れていて魚が一杯いる。いくらでもとれるのでどんどんとっていたら、現住民らしいのに追われて逃げ出した所で目がさめた。

コメント 以前はずい分長い間追われる夢が多かったのだが、この夢はわりに簡単に目がさめた。あるいは逃げおおせたのかもしれない。魚はかなり大きいやつである。

夢20 医者へ行こうとして広い大通りに出るが、横手の広場で阪神が紅白試合をしており、面白いのでつい見ている。大分たってから氣をとり直して医者の方へ行こうとするが、道一杯に大きい石が塞いでいる。ダメかなと思ってよく見たら、それが横倒しになった仏頭で、僅かの隙間をみつめてそこをすり抜けて医者の方へ行く。

コメント 20才台に「古寺巡礼」に感激してよく仏さんを見に行った。阪神はひいきのチームである。

解釈 夢19は明らかに今までとはタイプの違った夢である。追いかけられる夢は、受け入れ難い衝動が何らかの形で意識に近づいた時に生じやすい、といわれている。美しい大自然の中のたわむれは、一皮めくると生命にかかわる危険と背中合せなのであるが、この人はそれに気づいていない。何れにしろ、逃げられるかどうかは問題である間は、この人がこの原住民たちと仲間になる仕事は時期尚早である。ただしこのような夢の出現は、今までの仕事に一段落ついたことを示しているの

かもしれない。夢19が逃走のテーマであるとすれば、夢20は逆戻りあるいは吟味のテーマである。この人は医者へ行こうとして、紅白試合の誘惑にひっかかってしまう。何とか気をとり直しても、今度は大きな石の隙き間を通り抜けなければならない。石が仏頭であることは、「古寺巡礼」に示される知性と教養が、原住民とふれ合うのを妨げる可能性を示している。

今までと違ったタイプの夢の出たことを指摘すると共に、カウンセリングも一山越えた感じだから、これからどうするか次回までに考えておいてほしい、という、余裕をどう使うかが自分の問題と気づいたのが、元気の出た理由と思う、と答える。

第9回 7月12日

夢21 妻と子どもと一緒にタクシーに乗っている。妻が今度車を買ったというので、びっくりしながらもいいよと答えている。車で送り迎えしてくれれば助かる、という感じもある。

コメント 妻は結婚前から免許をとりたがっていたが、女のくせにという両親の意見でとれなかった。しかしいつもは何でも相談するのに勝手に決めたのがおかしい感じであった。

夢22 岡を家族と一緒に下ってゆき、向うの丘の中腹にある同僚の家に行こうとしている。一面の花畠で美しい。ところが谷の方では戦争をしていて砲声が聞える。自分たちは戦場のふちを通っているので危険はない。そのうち休憩している兵士たちに会う。黒人兵である。自分の持っている英文雑誌をくれというのだが、断っているうちに目がさめる。

コメント 岩波新書で「アンゴラの内戦」など読んだせいかと思う。

夢23 買い代えたばかりのステレオが故障したので業者に来てもらい、品目をメモしている。

コメント いろんなメーカーのものを集めて作ってあるので、はっきりした品目が要る。

夢24 円くて広い芝生の運動場。一か所を除いて放射線状に道（橋）が出ている。周りは堀なのだが水はない。道から向う側にかけて本の陳列場になっており、岐阜とか徳島の名がついている。広場の方に索引のようなものがあり、本の下にやはり府県名があって、その場所へ行けば見つかるようになっている。見知らぬ女の人と一緒に本を探している。

夢25 又異動があって本店の方に変っている。

コメント その方がやり甲斐のある仕事には違いない。

解釈 夢21では、夢1の自転車が家族と一緒にタクシーになっている。しかし妻が意外な一面をのぞかせる。この人はそれに腹を立てることもできず、夢の中でさえ感ずることができないみたいである。夢22はやはり家族連れである。同僚との家族ぐるみのつきあいは、漸くこの人のペルソナが固まりつつあるのかもしれない。しかし、平和な花畠の一方では戦争がある。それはこの人の心の中の葛藤かもしれないし、もっと現実的な、たとえば係長たちの血みどろな権力斗争かもしれない。しかし、それらはさし当ってこの人と関係ないのである。それにもかかわらず、この人は黒人兵と出会わざるをえない。これは夢19の原住民と同系列のイメージである。それがこの人のいわば

知的な側面をあらわす英文雑誌を媒介に、この人とかかわりを求めてくる。しかしこの人に彼らをうけ入れる用意はまだないようにみえる。夢23は、部品をよい所だけかき集めて作ったステレオが、思い通りに働かない、つまりうまく纏まっていないということか。夢24で、この人の聖域は本を通じて日本中に通じており、当分の間、この人は知性を通してしか世界とかかわれないのかもしれない。しかし未知の女性の出現は、新しい人間関係の可能性を示していて、夢19、22、と共に、この人のこれからの方向を暗示しているようである。つまりこの人は、いつか、今までこの人の世界になかった人たち、たとえば原住民や黒人兵や未知の女性とつきあってゆかねばならないのかもしれない。夢25は、一応出世ということになるのだろうか。司法試験を諦めたこの人が、今の係長と対決することなしに将来を展望するとすれば、配置転換が一番望ましい解決策かもしれない。

係長についてこの頃はコン畜生と思うようになった。課長は自分を信頼してくれているから、これからも棚上げされることはないと思う。以前に社内の文書事務講習会の講師を頼まれ、100人程を相手に講義した時、課長や支店長はねぎらってくれたのに、係長は何もいわなかった。もっとも、依頼のあった時係長に相談はしなかったらしい。そのへんの配慮が少し足りなかったことを指摘しておく。一応これで終りにしたいけれども、それにしてもただか2～3人分の仕事をひきうけたからといって参ってしまったのが解せない、というので、キヴアンドテークのテークが少なすぎたこと、つまりサービスのしずぎであったことを説明する。念の為もう一度入院して精密検査をうけるつもりだが、症状自体はほとんどなくなっている、という。

フォローアップ

その後2度手紙があり、張りつめていた気持ちに穴があいたようだ、といいながら、精密検査の結果異常もなく、一応正常に勤務している旨報告があった。その後約1年を経て再発はない。

考察

この人の問題は、夢の解釈を通して、前節でもある程度考察したつもりであるが、ここでもう一度整理の意味で考えておきたい。

この人の問題が、エリクソン流にいえば、モラトリアムの30才台までずれこんだ例であることは、すでにのべた。いい代えれば、ユング的な意味でのペルソナ作りの失敗なのである。その点、昨年度報告した症例(氏原1976)と基本的には同じ構造をもっている。しかし、なぜそうなったかについては、かなりニュアンスが異っているようである。

ある程度以上の能力の持ち主が、能力にふさわしくないポストに留まる時、ペルソナ作りは困難にならざるをえない。ペルソナは、世間に対しておのれが何者であるかを示すマスクとしての一面をもつ(Jung 1970)。同時にそれは、現実の世界で自らを實現してゆく枠組でもある。だから、ある時期までに何らかのペルソナを作りあげることは、マスクが肉にくいこんで本来の自分を窒息

させてしまう危険性をつねにはらみながら、心理的健康のためにも不可欠なのである。しかし、それが世間に対する顔である以上、ペルソナは世間の同意を必要とする。ここにズレが生ずると何らかの形で補修しなければならない。しかしそれはしばしば無理を伴って、それが大きくなると症状として現われることになる。

この人の場合、小学校から高校に至るまで、つねに優秀者のグループに属していたようである。それは当然エリートコースに属する者としてのペルソナを用意していた、といえよう。だからこの人にとって、進学を諦めなければならなかったのは、大きい挫折であった筈である。しかしこの人は、その挫折をその儘にうけとめることができなかった。それは父親の失職によるものであって、この人の責任にかかわるものではない。だからこの人が傷つく必要はない、というわけである。この人のテーマエ主義がここから始まる。あるべき姿が目ざされて、今ある姿は故意に見えなくされてしまう。今の実感、つまり本音が押し殺され、立て前としての善意だけが支配的になる。幸か不幸かこの人は、そうしたありようを生きぬくだけの力に恵まれていた。そこでこの人は、まず組合運動に情熱を燃やす。そこで弁護士たちとやりあうようになり、彼らと同じ資格をとることによって、自由法曹団のような形で労働者のために働こうとする。そのため大学に入学し、卒業後も司法試験を目ざして努力を続けるのである。しかも、必ずしも合否にはこだわらず、身につけた知識が何らかの形でみんなの役に立てばよい、という。又、係の中に落ちこぼれの出ないように配慮し、すべての仕事を全員で分担することによって、お互いの差が顕わにならないようにする。そのためには遅れた人をカバーして2人前も3人前も働くのである。さらに、教養を身につけるために、1か月1万円以上の本を買いこみ、ほとんど目を通している。当然上司の信頼も厚く、公私の仕事を頼まれ、係長の異動に当っては、課長から相談される程である。その自信は、どんな係長が来ても係の纏りが崩れたり仕事の渋滞はない、という見通しにつながっている。又この人は、組合員に労働法の講義をしたり、文書事務の講習会の講師を依頼されたりしている。女子大出の女性と結婚し、今度結婚するとしても今の妻を選ぶという位である。母と妻の間もうまくいっている。自分が倒れても、今までの実績で係の仕事はスムーズに動いているし、係長もずい分親切になってきた。たしかに自分と合わない所はあるが、そんな人と思えば腹も立たない。それだけを聞けば、すべてがこの人にとってうまく回転しているのである。

しかしこれは、すべにのべたように、今ある姿を顧みず、あるべき姿だけを志向した結果である。そのためにこの人は、かなりの程度感ずる能力を失ってしまったのではないか。というより、現に感じていることを意識化することができなくなったのではないか。このことは、万事にゆき届いた配慮を示すこの人が、たとえば係の人たちの能力差を目立たなくさせようとする余り、ある程度自分の能力を誇示したり、少しでも残業手当を稼ぎたい人のことを忘れていることに現われている。あるいは、たとえ休み時間でも、皆の前で司法試験の勉強をすることが、そういうことに無縁な人を傷つけるかもしれぬことに気づいていない。又、そういう努力が、この人の今の職場に骨を埋める気のないこと、したがって今の仲間を本当の仲間とは思っていないこと、を露わにしていること

にも気づいていない。係長になってみた所で仕方がない、という態度も、せめて係長になりたいと思っている人にとって、愉快的ことではない。さらに、どんな係長が来ても係としての纏りを崩すまいというのは、事実上係の中心が自分であることを宣言したものである。係の人たちが欠勤の断りをまずこの人にするという習慣が、ひょっとしたら係長の気分を損ねていたと気づくのは、終結間際においてであった。支店長や課長の個人的な用事までひきうけて、支店全体に睨みをきかすことと、組合に忠実であろうとする態度の矛盾も考えられていない。さらにいえば、この人との主導権争いに勝って係長の態度が軟化してきたことを、やっと自分の気持を判ってきてくれたか、と喜んでさえいる始末である。同じく、皆がよく働いてくれるので嬉しいといい、自分の存在が係で余り必要でなくなったことを、ネガティブな意味では捕えようとししない。係長に対する腹立ちを表明するのは、やっと最終回の面接においてであるし、おそらく妻子に対する不満ないしは妻子のこの人に対する不満も、ない筈はないと思うのに一言も語られていない。以上要するにこの人にとっては、すべてが表の問題であり、裏が問題になることはほとんどなかったわけである。

だから一度裏の世界、つまり夢の世界に目をやると、この人の世界は余程変った様相をおびてくる。まずこの人は、お金を見せびらかしながら自転車に乗っている（夢1）。組合大会では多くの人を颯爽とさばいている（夢2）し、あれだけ纏りとか協調を考えるこの人が、人とまったく違ったことをやっておかしいとも思わない（夢5、6）。親しい筈の先輩が妙に無愛想であったり、逆に自分が友人に愛想がない（夢10、12）。妻子が必ずしも今の生活に満足しているのではないらしい（夢8）し、仕事そのものに凡てをうちこむ程の意味を感じられない（夢12、17）。上昇志向と挫折感がある（夢13、14）、といった具合である。おそらくこうした本音と前述の立て前、いいかえれば裏と表のギャップを埋めきれなくなった時、この人は発症したものと思われる。その結実因子にしてからが、医師の誤診に基づくとはいえ、この年で死の不安をまったく感じていなかったこと自体、すでにおかしい。

しかしこの人の発症については、さらにもう一つ考えなければならぬことがある。それは、この人の立て前にもかかわらず、この人の現実行動に現われていた上昇志向なり権力志向が挫折したことである。この人が何と考えようと、司法試験は上昇志向の現われであった。これに合格することは、少なくとも高校時代までの友人との格差を一挙に埋めることを意味している。理由はともあれこの人は、2回目の面接で司法試験を断念したことをのべている。発症が断念を促したのか、断念が発症をもたらしたのかは難しい問題である。しかし、この断念によって、この人がひそかに暖めていたであろう将来構想が決定的に崩れたことは否定できない。同じことは、この人が係長との権力斗争に敗れたことにも現われている。この人が現実場面でかなり権力志向的な行動をしていたことは、すでにのべた。それはさし当っては係長との主導権争いとなって現われる。この係長の強味は、この人の裏の意味を知りぬいていることである。この人が、ことさらに目をそむけてきた人間の一面で勝負してきた人ともいえよう。だから、この人の善意を見ることのできないタイプ、といった方がよいくらいである。そこでうがったいい方をすれば、この人が立て前だけの一面性を克服す

るためには、こういうタイプの人と対決することが必要なのであった。つまり、この人が抑えに抑えてきたコンプレックスを、その儘体現しているこの係長とやりあうことによって、この人は自分の影の部分に気づかざるをえない。その上、この係長に敗れたことは、この人のひそかなエリート意識をうち崩し、結局、係長と自分とが同じ高卒仲間にすぎないことを思い知らせることになる。この人には、たとえば出色の係員、支店全体に睨みを利かす黒幕的存在、といった意識によって、すでにのべた挫折感をカバーしてきた可能性がある。それが係長一人を扱いかねて、ましてや係におけるイニシアティブまで奪われるに至っては、今までこの人を支えていたひそやかな自尊心が、足元から崩れさったことになる。

つまりこの人は、一方で司法試験を諦め、他方職場での実力者としての立場を失った。年令的に考えて、もう一度トライするチャンスはまずありえない。そしてそれらのことがほとんど意識化されなかった所に、発症の真の原因がある、と思う。したがってカウンセリングのプロセスは、その事実をどう意識化してゆくか、ということであった。そのために夢を利用したことがかなり効果的であった、と私は考えている。

なおこのケースは、苦しいながらもこの人が、今ある自分に即したペルソナを作り始めた所で終わっている。カウンセラー・クライアント共に、それで一山越えた、と判断したためである。しかしこの人には、なお処理しなければならぬ問題が残されている。それは一言でいえば、本音にもっと敏感になってゆくこと、と思うが、それには若干の危険が伴うかもしれない。というのは、対人関係に思いがけぬ変化の現われる可能性があるからである。夢でいえば 19、22、24、の系列が問題で、とくにこの未知の女性は何者であるのかは興味がある。しかしそれについて話しあうことはしなかった。一つには一まず症状が消えていること、二つには、これからのペルソナ作り自体、現実吟味の伴う作業であるだけに、それだけでも相当なエネルギーが必要だと思ったからである。さらにいえば、山の頂きが見えたからといって、麓から頂上に至る道は尚遙かなもの(Jung 1976)であるからでもあった。

要約

心臓神経症的な症状を主訴とし、出勤できなくなった、38才の晩婚の男子高卒会社員との9回にわたる面接経過を報告した。就職以来もち続けてきた上昇志向の挫折と、新係長との確執を通して、従来職場において占めていた権力志向的地盤の喪失が、医師の誤診に伴う身体的不安を結実因子として発症したものである。エリクソン流に言えばモラトリアムの30才台へのずれこみ、ユング流に言えばペルソナ作りの失敗ということになろう。なお、面接を通じて報告された25の夢をすべて記載し、それについての解釈をそえた。夢について話しあったことが、治療の経過をかなり促進したものと考えている。

付記 この論文の一部は日本心理学第41回大会で報告した(氏原1977)。

参考文献

- エリクソン, E.H. (小此木啓吾他訳) 1973 自我同一性 誠信書房
- フロム, E. (谷口、早坂訳) 1964 人間における自由 創元新社
- 東山紘久 1976 臨床場面における夢の利用 大阪教育大学紀要 vol.25 No.1 35~45
- Jung, C.G. 1970 The relation between the ego and the unconscious in Collected Works vol.7 Princeton University Press 121~242
- Jung, C.G. 1976 The visions seminars Spring publication
- 笠原嘉 1976 青年期 中央公論社
- 河合隼雄 1974 夢分析による学校恐怖症高校生の治療例 臨床心理事例研究 1 京都大学教育学部 3~12
- 河合隼雄 1976 母性社会日本の病理 中央公論社
- 河合隼雄(編著) 1977 心理療法の実例 誠信書房
- 森谷寛之 1977 宗教青年の場合—夢分析を中心に— 臨床心理事例研究 4 京都大学教育学部 1~8
- 織田尚生 1977 分裂した自己像の総合過程の進展と女性性の獲得—夢分析による境器例にたいする治療から—
河合・佐治・成瀬(編) 臨床心理ケース研究 1 誠信書房 23~38
- 鰐幹八郎ほか 1974 シンポジウム18 夢分析の理論と臨床 日本心理学会第38回大会発表論文集 151~160
- 氏原寛 1977 不安神経症患者との面接例 大阪外国語大学学報 vol.38 207~222
- 氏原寛 1977 ある心臓神経症患者の治療例—夢をめぐって— 日本心理学会第41回大会発表論文集 1012~1013